

園長だより

十五号二九年十二月
竹鼻保育園
園長 川出昭順

報恩講法話

子ども報恩講にお参り下さいましてありがとうございます。園長の法話を載せさせていただきます。お目を通していただけるとありがたいです。

中村久子さんの話

高山に昔、中村久子さんという人がおりました。その人は小さいときに凍傷がもとで脱疽という病気にかかり、昼夜の別なく高い熱と手足が真っ黒に焼ける痛みが続く、ある日突然左手が手首からポロリと落ちたといひます。その後、右手は手首から、左足は膝とかかとの中間、右足は



保育園に消防車がきました。地震と火災の避難訓練で先生も大変でした。くま組のクラスだよりからです。

かかとかから切断されました。七歳でお父さんは亡くなり、おばあさんとお母さんが厳しくも愛情ある子育てのお陰で、食事、トイレ、風呂といった身の回りのことは勿論、大変な苦勞の末、文字や編み物もできるようになりました。口に筆をくわえて字を書き、針を唇と指のない腕で裁縫もできるようになったのです。彼女は大きくなつてからは、生活の糧を得るため、見世物小屋でだるま娘として芸人になつて働いたのです。

四十一歳の時、三重苦（見えない、聞こえない、話せない）を背負つたヘレンケラーと出会いました。ケラー氏は久子さんを抱きかかえた時、驚愕しました。両手両足のないことを知つたのです。そして、「私より不幸な人、私より偉大な人」と称賛したそうです。

久子さんは親鸞聖人のお念仏の教えに出会い、生きていく大きな光となつたのです。自分の体について恨む言葉もなく、むしろ障害のおかげで強く生きる機会をもらったと、仏様から賜つた身体と生かされる喜びと尊さと感謝を述べたといひます。

語録 人の命とはつくづく不思議なもの。確かなことは自分で生きているのではない。生かされているのだという事です。どんなところにも必ず生かされていく道がある。すなわち人生に絶望はなし。いかなる人生においても決して絶望はないのだ。

子どもたちには難しい話でありましたが、大人の皆さまには心打つものがあつたと思ひます。語録の言葉は、私に生きる力をいただくことができる言葉ではないでしょうか。

法話2

今から五十年ほど前、アメリカのヘックマンというノベル賞学者が、黒人貧困層の子供たち、到底幼稚園には通えない家庭の子たちを二つの群に分けた。一つは三歳から二年間だけ幼稚園に通う、週に一回子供たちの親は、先生と家庭の様子や子どもの発達について話し合いの機会を得た。もう一つの群はこうした介入を全く受けない子供たちであった。その後追跡調査を受け、様々な観点から比較され、四十歳までの調査報告が公表されている。

介入を受けた子供たちのほうが、高校卒業率、収入、持ち家率などにおいて高く、離婚率、犯罪率、生活保護率において低いという結果であった。幼稚園での教育によつて知能指数が伸びて大人になって成功を手にしたというところかも知れないが、確かに幼稚園に通っている間の知能指数の伸びには目を見張るものがあった。しかし、この伸びは長続きしなかった。介入が終了した直後から二つの群の差は徐々に狭まり、八歳の時点ではほとんど違いがなくなつてしまつた。

注目すべきは、四十歳の時点ではつきりとした違いが認められたということだ。ヘックマンはこの結果を受けて、「乳幼児において重要なのは、一般的に頭の出来といわれるような能力ではなく、むしろ隠された心の力をしっかりと身に付けることである」と主張した。この隠された心の力というのは、幼稚園の特別のプログラムでは必ずしもなく、幼稚園には先生という温かい心と良識を持った人がおり、家庭では困窮などで十分なケアを受けることができない中、幼稚園に行けばそこに確かな先

生という存在があり、しっかりと抱きしめられ、そこで慰めを受け、そして元気に遊びに送り出してもらうということを繰り返して、安定して経験できたということが考えられる。まさしく温かく確かなケアの中に、人が人生を生きぬく上で最も大切なものの教育が自然と含まれていた。

(東京大学の遠藤利彦先生の文です。一年前の園長だより4号に掲載したものです。あまりに重要な文でしたので再度お話しし、園長だよりに掲載しました)

現在、日本では保育園幼稚園こども園といろいろありますが、みんな一緒です。この心を育てることが肝要であると考えられます。

更に、考えると、人間が生きるためには温かいケアが必要だということです。大人になっても同じです。幼児時期にこのケアが十分ある時は大人になっても苦難に立ち向かう力がつくのでしよう。しかし、人間は弱い生き物です。全くケアがなくなつた時、生きる力、生きる意欲を無くします。この問題を親鸞聖人は「信」ということで解決の道を示して下さいます。人間の信は、人間の都合です。都合が悪くなると生きる力は塞がってしまいます。都合の良し悪しを超えたところに仏様の信があるのです。それに気づいた時、仏様が私をケアし続けて下さつていたことを知るので。中村久子さんの語録を読んで、どうしてこんな言葉が出てくるのかと思ひますが、そのことに気づいた人だからです。それを「他力(仏様の力)の信」といいます。全ての人が平等に仏様に信じられているのです。それに私が気づいた時、安心の世界をいただくことができるのです。